15 世紀琉球古刺繍の検証に向けて

－北海道にのこる北方民族ウイルタの刺繍－

寺　田　貴　子

For verification of the 15th century Ryukyuan embroidery:
Uilta embroidery in Hokkaido

TERADA, Takako

Abstract

In October 2019 for the purpose of obtain contributable information to verification of the 15th century Ryukyuan embroidery, the author visited a circle of Uilta embroidery ‘Hurep-kai’ and Hokkaido Museum of Northern Peoples in Abashiri city, and confirm the Uilta embroidery techniques. Notable similarities between Uilta and Ryukyuan embroidery were observed on the collected antiques. Namely, a kind of herringbone stitch and flat silk thread which is untwisted or a less twisted filament silk were used in the Uilta embroidery.

キーワード：琉球古刺繍、ウイルタ刺繍、ヘリンボーンステッチ、琉球千鳥繍い
Key words: Rukyuan embroidery, Uilta embroidery, herringbone stich, Ryukyuan herringbone stitch

1.　はじめに

琉球は、北は鹿児島県吐噶喇列島の臥陀島から、南は沖縄県の波照間島・与那国島までを王国時代（1429 年～1879 年）の最大領域としている [1)]。その琉球の文化圏には、15 世紀から 16 世紀に製作された刺繍品がいくつか伝世しており [2, 3)]、筆者はそれらに施されている刺繍を琉球古刺刺繍と称し、最も多く用いられている、極めて特徴的な繍い技法を琉球千鳥繍いと称している。

現時点では、琉球古刺繍の繍い技法に関する歴史的な記録は見当たらず、刺繍の継承もその後にはみられないことなどから、なぜその技法を主体としているのか、その技法には何らかの意味があるのかなどの繍いの意図、製作地や製作者あるいは製作を依頼した者、および琉球古刺繍の発生や伝播の経路などについては、まだ解明されていない。

筆者は、琉球古刺繍の繍いの種類と技法を明らかにするとともに、その系譜を検証する手掛かりを得ようと、2005 年から国内外において調査研究を行ってきた [4-16)]。今回、2018 年 9 月に、知人から「サハリンのウイルタ刺繍と似ているのでは」との連絡を受け、情報を確認し、資料収集に着手した。その過程で、ウイルタ民族以外の近隣民族の刺繍にも資料数は少ないものの琉球千鳥繍いに似た技法がみられることや、北海道にはウイルタ刺繍の資料を所有している機関がいくつかあり、ウイルタ刺繍を継承しているサークルもあることなどがわかった。そして、翌年 10 月には網走市のウイルタ刺繍サークル「フレップ会」と「北海道立北方民族博物館」を訪問し、ウイルタ刺繍には琉球千鳥繍いと同じ技法が用いられていることを確認した。

本報告においては、琉球古刺繍とウイルタ刺繍、それぞれの系譜には不明な部分が多く、比較した刺繍資料の製作年代にも時代的な隔たりが大きくあるものの、技法の類似性に着目した調査研究の成果の中から、特記しておきたいことを述べる。

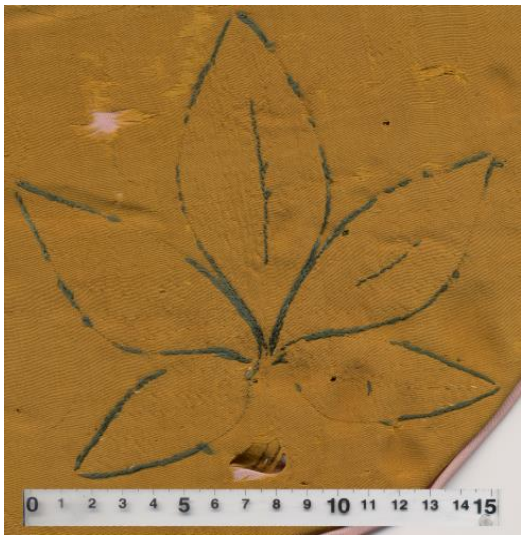
2.　背景

1）琉球古刺繍

琉球文化圏にのこる刺繍品のなかで、年代測定が行われた資料のうち、琉球千鳥繍いが施されたものは 6 資料あり、それらは 1427 年から 1522 年の約 100 年間に集中している [2)]。その時代、あるいはそれ以前の、特に日本や中国および韓国などの近隣諸国において、琉球千鳥繍いに類似した技法を主体とする刺繍品に関する資料や情報は、筆者はまだ確認できていない。

図 1 に、琉球千鳥繍いによる刺繍の一例（部分）を示す。原資料は尚円王（在位 1469～1476 年）の姉で、沖縄県伊是名島の神女（ノロ）「伊平屋阿母加那志」の家系にのこる総刺繍の大袖衣で [5,14,16)]、製作年代は 1427 年から 1472 年、現時点で最も古い琉球古刺繍の資料である。基布は絹繻子、刺繍糸は無撚の絹の釜糸（平糸）、刺繍技法には主体である琉球千鳥繍いのほか、部分的に平繍い（サテンステッチ）、鎖繍い（チェーンステッチ）、まつい繍い（アウトラインステッチ）、上掛け繍い（押さえ繍い、コーチングステッチ）などがみられる。

表側



裏側

部分拡大

部分拡大

図 1　伊是名島に伝世する 15 世紀の総刺繍衣裳にみられる琉球千鳥繍い／部分 [16)]
（写真内のスケールは全 15 ㎝）

図 2 に、本研究で着目しているヘリンボーンステッチや琉球千鳥繍いの見本繍いを示す。ヘリン

ボーンステッチ（herringbone／魚・ニシンの骨の意）は表側の糸の X 字型どうしが接することなく繍われるため、裏側ではほぼ等間隔に針目が空いて、並縫いのような点線状になる。クローズドヘリンボーンステッチでは、X 字型が接しているため、裏側は隣り合う針目の点線が接して、本返し縫いやミシン目のような、直線状となる。

琉球千鳥繍いは、繍い始め・1 針めはヘリンボーンステッチと同様で、2 針めはクローズドヘリンボーンステッチと同様になり、3 針め以降から前の針目を 1 つ深くすくう 1 本立ち、あるいは 2 つすくう 2 本立ちなどと、間に入る糸をより多くすくう技法である。15 世紀に製作された原資料にみられる琉球千鳥繍いでは、針目の深さは刺繍のモチーフ、特に刺繍面の広さによって異なっているが、概して 3～4 本立ちが多く、それ以上のものもみられる。刺繍の裏側の特徴は明確で、まつい繍い（アウトラインステッチもしくはバックステッチ）のように糸足が斜めに複数本重なった線状になる。図案線の形状（文様）や針の運び方によっては、裏側の糸足が左右から組み合って、鎖繍い（チェーンステッチ）のようになることがある。

琉球千鳥繍いの特徴は、X 字型に深く交差するため刺繍糸の安定性が高まり、糸の並びがより緻密で立体的で、糸の光沢においても斜め方向に変化（陰影）がみられることから文様に動きが加味される効果が高まることである。また、刺繍面は糸で覆われても、文様の輪郭線上で基布をすくい、表側のみで糸を渡すことから、裏面には糸は回らず、いわゆる片面繍い、渡し繍いとなっており、見かけほど糸の消費量は多くはない。

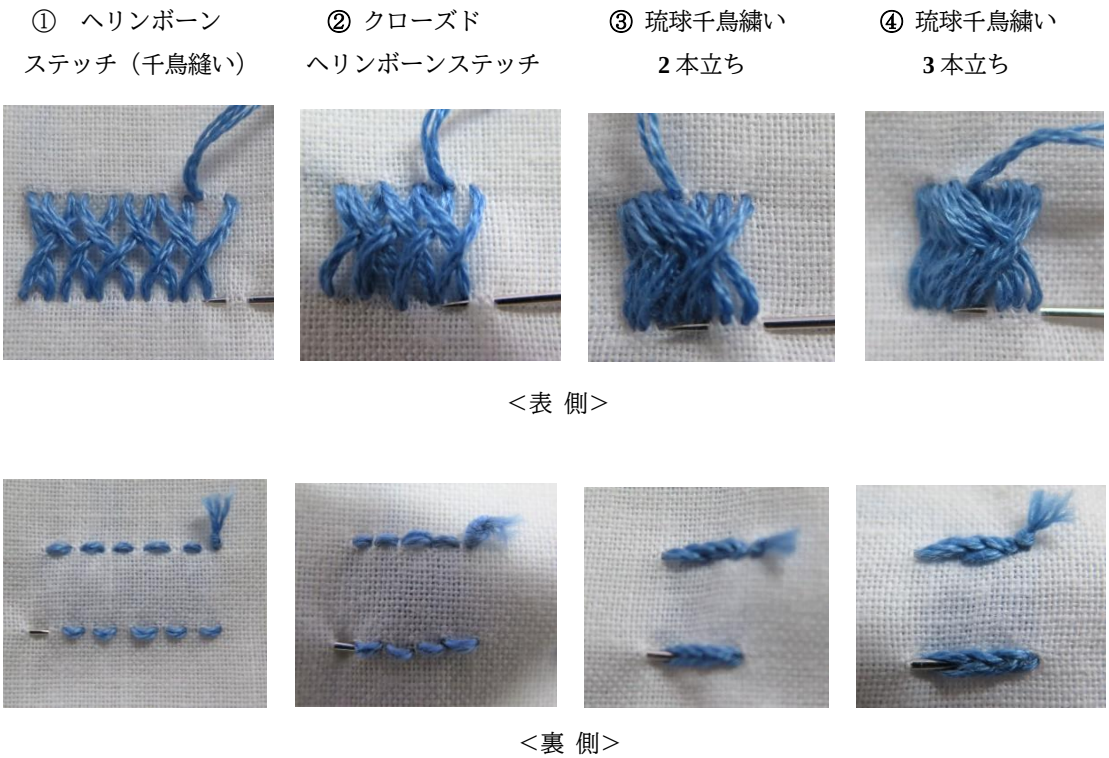


図 2　ヘリンボーンステッチと琉球千鳥繍いの見本（筆者作）

しかし、針目が深くなるほど糸の使用量は増大することになる。例えば、同じ面積を繍う場合、琉球千鳥繍い・3 本立ちでは、ヘリンボーンステッチの約 4 倍の、クローズドヘリンボーンステッチの約 2.5 倍の糸量を要する。琉球千鳥繍いは、絹糸が現代以上に貴重品であった時代においては、贅沢な繍い技法のひとつであったとみなすことができ、琉球千鳥繍いを主体とした総刺繍の大袖衣は、それを着用した神女（ノロ）や、それを与えたとされる琉球王府の威厳を強調していたと言え

よう。

2）ウイルタ民族

民族名については時代や国および民族の言語等によってさまざまであるため、本稿では、引用等における表記の整合性を図るため、当該箇所の後ろに（＊ウイルタ）を、また、隣族のニヴフも同様に（＊ニヴフ）を付記することとする。

図 3 に、サハリンと北海道の位置を示す。ウイルタ民族がいつ頃サハリンに住むようになったか、現時点では明確でない。ウイルタは、かつてオロッコの名で知られており、主にサハリン内陸部のティミ（ツイミ）川流域、ポロナイ川流域、タライカ湖周辺に居住し、その文化はアムールのツングース系諸民族と多くの共通点を持つ。また、隣族のニヴヒ（＊ニヴフ）との関係も深い。馴鹿（トナカイ）を飼育することは周辺諸民族との最大の相違点で、宗教はシャーマニズムと自然崇拝が主である [17]。

なお、ウイルタ刺繍と似た技法がみられる民族にはニヴフ、樺太アイヌ、オロチョン、ウデヘがあるが、ニヴフは大陸のアムール川下流域からサハリン北部に、樺太アイヌはサハリン南部に居住していた。オロチョンやウデヘの居住域は大陸側である。

図 3　サハリンと北海道の位置

樺太の地名については、【「カバフト」「旧カラト」「カラトは唐子に同じ」『「フト」とは北人「ヒト」といふ言の訛なり』「何をもってカラフトと称するといふに、彼より漢製の諸品を携来るものありて、夷人と交易する事年久し」】とある。唐子については、「アイヌ以外の異種を汎称す。カラト島の名は、此れにニクブン（＊ニヴフ）、オロッコ（＊ウイルタ）等の異種の雑居するに因る、必しも漢製唐物の交易に待たず」とある [18]。

3）ウイルタ刺繍に関する歴史的な概観

ウイルタ刺繍がいつ頃から行われたかについては現時点では明確でない。ウイルタ民族とウイルタ刺繍が北海道にのこっていることへの歴史的な背景について以下に概述する。

およそ 6 世紀から 11 世紀には、サハリン、北海道の北部から東部、千島の島々に分布する「オホーツク文化」と呼ばれる独自な文化が形成され、すでに人の生活とモノの交易が行われていた痕跡がある [19]。

13 世紀から 16 世紀には、サハリンの諸民族と元・明朝との朝貢関係や大陸の諸民族との交流が展開されることになる [20, 21]。元代（1271 年～1368 年）の末から、サハリンにまでかなり厳格な中華の支配が及び、明代（1368 年～1644 年）に入ると中国とサハリン諸民族との関係はいっそう緊密なものとなっていた。1410 年にはツイミ川流域に兀列河（ウリエホー）衛を、1428 年までには、ポロナイ川流域に波羅河（ポロポー）衛を設置し、当該地域住民（民族）の首長層を衛の役人に任じている。ここで、「兀列河衛の置かれた地域は、一部ギリヤーク（＊ニヴフ）民族を含みつつも主としてオロッコ民族（現ウイルタ）の居住地、波羅河衛のおかれた地域は、オロッコ（＊ウイルタ）・ギリヤーク（＊ニヴフ）・アイヌなどの諸民族の居住地であったとみられる」[21]とある。そして、兀列河衛は 1431 年と 1437 年に、波羅河衛は 1428 年と 1463 年に朝貢し、サハリンの諸民族と明朝との朝貢関係が少なくとも 15 世紀末から 16 世紀初頭ごろまでは続いていたとみなされている。諸役人には朝貢の際、綵段（緞子）・絹・紵絲衣・靴韈などが与えられており、1583 年に至っても依然

として明朝に対して「襲職」を要請していた。「襲職」は朝貢の際に行われ、貢物は主として貂皮であり、明朝は回賜として先に述べた絹製品や衣服を与えていたため、この時期にはこうした絹織物や衣服がサハリンの諸民族に確実にもたらされていた。清王朝（1636 年～1912 年）興隆の基盤は毛皮の富にあったとされ、この地方の交易は「山丹交易」として日本でも広く知られるようになるが、1868 年成立の明治政府によって廃止さることとなった。

1808 年には、間宮林蔵が幕府の命により松田伝十郎に従って樺太を探索して樺太が島であることを発見し、北部にはアイヌ語が通じないオロッコ（＊ウイルタ）と呼ばれる民族がいることや諸民族の衣食住、日常生活の特徴を観察している。また、翌年は海峡を渡ってアムール川下流を調査し、清国人が多くいる状況などを報告している [22)]。

1854 年の堀利熙・村垣範正による樺太巡検と鈴木茶渓の記録をもとに 1856 年に刊行された松浦武四郎の資料には、「ここより奥へはタバコか針がないと用が足りないので持ってゆこうということになり」「近年黒竜江の川筋でロシアと満州の合戦があった。彼地へ交易に行けなくタバコ、針に不自由するというので彼等に針を一本ずつ与えると彼等はとても悦んだ」ニクブン（＊ニヴフ人）へ「ここへはなぜ住んでいるのかと聞くと、丸木舟を作りこれをヲロッコ（＊ウイルタ）人とアザラシ皮に交換するとして、川原に 5～6 艘も作ってあり」「ニクブン人はこの辺りでヲロッコと交易するがカワウソ・キツネ・テンの皮は貴重品である。その次にアザラシの皮を用い何品によらずこれらと取りかえて」とある [23)]。

日露戦争後、1905 年のポーツマス条約においてサハリンの北緯 50 度以北はロシア、以南は 1945 年までの 40 年間、日本の領土となり、大正末から昭和初期にはウイルタやニヴフの人たちは敷香（ポロナイスク）郊外の「オタスの杜」と呼ばれた場所で暮らし、教育所では日本語が教えられた。そして、オタスでは日本人観光客向けにトナカイ皮の財布やテーブルセンターに似た円形や四角形の敷物など工芸品が数多く作られた。教育所の技芸科における手工芸品については、1944 年の谷内尚文の見学記 [24)]に「刺繍などは特に美しい。中には馴鹿の皮にいろいろの絲を縫ひ込んで模様がつくられてあるものもある。たいていの刺繍は幾何学的なもので、シムメトリか或は四方に繰り返された骨子のものが頗る多い。驚いたのは革の裏側へ絲をだしてゐない刺繍であった」とある。

日本の第二次世界大戦の敗戦に伴って北海道へ移住したウイルタやニヴフがあり、網走市に移住したウイルタの人たちが中心になって、1978 年にウイルタの刺繍、衣裳、切紙紋様（イルガ）、生活品などの資料館「ジャッカ・ドフニ」が建つ [25)]。そして、ウイルタ女性の指導の下にウイルタ刺繍が網走市民に伝わり、刺繍サークル「フレップ会」において現在もウイルタ刺繍が継承されている。2010 年に「ジャッカ・ドフニ資料館」は閉館し、ウイルタの資料は「北海道立北方民族博物館」が保管している。

3. ウイルタ刺繍

1）情報と画像の入手

2018 年 9 月 5 日に、筆者の知人で北米・カルフォルニア州在住の織物作家から、「この技法は調べていらっしゃるものと同じでしょうか。説明にウイルタと書かれていました。」との E メールが届いた。紹介された画像をみると、琉球千鳥繍いに似た技法とチェーンステッチとで、向かい合ったハート形の文様が刺繍されていた。筆者はすぐに「ありがとうございます。その画像の刺繍技法は、そうです。私が調べているものと同じです。ウイルタ刺繍のことは全く知りませんでしたので、早速、検索にかかりたいと思います」と返信した。

インターネット上には予想以上にウイルタ刺繍の画像が掲載されており、そのうち、本稿への掲載と公開について許諾が得られたものを図 4～6 に示す。刺繍技法はクローズドヘリンボーンステッチとチェーンステッチが主体で、図 4 左側の煙草入れ両面の、中央の四枚のしずく型文様に、後述

する、琉球千鳥繍いに似たウイルタ刺繍の技法「葉っぱにするもの」が施されている。

2）先行研究等

間宮林蔵は [22]、「ヲロッコ（＊ウイルタ）夷」の巻において、衣服はほとんど獣皮でつくられていること、木綿衣は皆山丹夷との交易品であり、「布帛の類たへて自製する所の者なし」、生活文化にはスメレンクル（＊ニヴフ）と異ならないことが多いと述べている。また、「スメレンクル夷」の巻においては、「女夷の製するに枕・笠の二品あり、其状図の如し。枕は木綿を以て是を造り、色絹を以て其横面に文彩し、頭の触るる処は別の木綿を巻く」と報告している。ここで、「色絹を以て文彩し」とあるのは、絹糸による刺繍とみなすことができよう。掲載されている手描きの枕の図からは、刺繍の技法は把握できないが、笠の文様は唐草や渦巻状の文様である。枕には中心から四方に広がった文様があり、図 9 の中央にみられるウイルタの文様と近似している。

宮本馨太郎は [26]、「服飾の上からは、オロッコ（＊ウイルタ）とギリヤーク（＊ニヴフ）との間に大なる差異を認めることはできない」「毛皮の長靴の筒口の部分は布切でふちどり、その外側に色糸で刺繍をほどこして、ここに締紐を通す」「男子の彫刻と女子の刺繍は彼らの誇る技術である」「女子の刺繍は、多くは馴鹿の鞣した皮、皮袋・皮手袋・皮靴などにほどこされる」「刺繍は皮の裏面に全く針目を見せないのを特色としており、オタスの教育所でオロッコ・ギリヤークの女児が色紙を切り抜いて型紙を作り、とりどりの色糸で刺繍しているのをしばしば実見した」と述べている。

河野本道は [27]、旭川市博物館所蔵の刺繍資料について、「ニクブン（＊ニヴフ）の全資料とウイタ（＊ウイルタ）の多くの資料は、オタスで日本人が職業訓練あるいは実業のために、刺繍糸を豊富に、無作為に導入して作成されたものであり、実生活に用いられたものではない」と前置きし、それぞれの刺繍法について詳述している。ヘリンボーンステッチ、チェーンステッチ、アウトラインステッチは 3 民族に共通して認められ、「ウイタ（＊ウイルタ）とニクブン（＊ニヴフ）の刺繍は同類のようで、オロチョンの刺繍は二者と離れた大陸にあることなどから多少なりとも特徴的な伝統を築いていた可能性がある」と述べている。

田中了は [28]、ウイルタの刺繍について「衣装などに施されている刺繍糸は絹糸である。古いものは大陸（中国）との交易で入手したものであろう。刺繍は婦女子には欠かせないたしなみのひとつ。祖母や母の刺繍を見て娘たちは自然に技術も習得する。12、3 歳にもなれば、技術的にも一人前になる。特に、トナカイのなめし皮に施している刺繍技術には目を見張る。針を薄いなめし皮に突き通さず糸目を皮の裏側には見せないのである。高度な技術を持っている」と述べている。

池上二良は [29]、1905 年から 1945 年のサハリンにおけるウイルタの写真や、1956 年に池上氏がウイルタの女性（S.C さん）に作ってもらった、ウイルタ刺繍の繍い方を紹介している。「刺繍には古くは中国渡来の səurə (絹布) からぬきとった糸を使った」とあり、10 種の技法の中に「9. sorkomi urpuri クロスヘリンボンステッチ」がある。田中淑乃 [30] は「そのウイルタ語の意味は確認できなかった」としている。また、刺繍の裏面は、本返し縫いのように連続した線状で糸足が空いた箇所もみられ、アウトライン風ではないことから、琉球千鳥繍いではなく、クローズドヘリンボーンステッチとみなされる。ここで、池上が紹介している写真の「16. カウラ家屋 kaura 幌内川川上の Xagja」では、男性 5 名全員が、煙草入れの袋物を紐で首から掛けて胸元中央に吊り下げており、着用の仕方と煙草の貴重さが示唆されていて、興味深い。

米村哲英 [31] は、「皮製品に施す刺繍技法は、他民族ではみることのできないウイルタ族独特の技術である」「糸目は裏面に全く現れない手法をとる」と述べている。当文献には樺太アイヌの刺繍が 4 つ紹介されており、そのうちの「皿敷（敷皮）」は、文様の内側がヘリンボーンステッチとクローズドヘリンボーンステッチで繍われているとみられる。

白石英才と笹倉いる美 [32] は、ニヴフの刺繍技法を報告しており、資料の 15 種類の中に『「2.［魚］ガンヂ　脊椎　模様に用ふ」クローズドヘリンボーンステッチ』（一部抜粋）との技法が示されてい

る。

図 4　ウイルタ刺繍の袋物(1) 煙草入れ
青・赤 2 種／上・表側もしくは裏側、下・裏側もしくは表側
縦；約 12.8 ㎝（紐も含めた長さ 20.2 ㎝）／横；約 10.0 ㎝（最大幅）
（ 写真提供／株式会社 懐玉堂、http://kaigyoku.jp/ ）

図 5　ウイルタ刺繍の袋物（2）財布
大小 2 種／上・表側、下・内側
左（大）；縦・約 18 ㎝／横・約 13 ㎝、右（小）；縦・約 14.5 ㎝／横・約 10.4 ㎝
（ 写真提供／株式会社 懐玉堂、http://kaigyoku.jp/ ）

図 6　ウイルタ刺繍の敷物（皿敷）
皿敷；直径 約 23.5 ㎝
（ 写真提供／株式会社 懐玉堂、http://kaigyoku.jp/ ）

3）フレップ会訪問

北海道網走市にあるウイルタ刺繍サークル・フレップ会と北海道立北方民族博物館を訪問するにあたり、まず、北海道立北方民族博物館の学芸員へ連絡（E メール）を試みたところ、ほどなく返事が届き、訪問の受け入れとフレップ会代表者との連絡もとっていただくことができた。

フレップ会へは、2019 年 9 月 10 日（火）の 10 時から 12 時まで、「網走エコーセンター2000」にて活動中のところを訪問した（図 7～10）。そして、会員の刺繍作業の見学と、会の代表者およびウイルタ女性から刺繍の指導を受けた唯一の会員の方から話を聞くことができ、おおよそ次のようなことがわかった。

図７　フレップ会の活動のようす

図８　フレップ会員作品

図 9　ウイルタ刺繍の表側

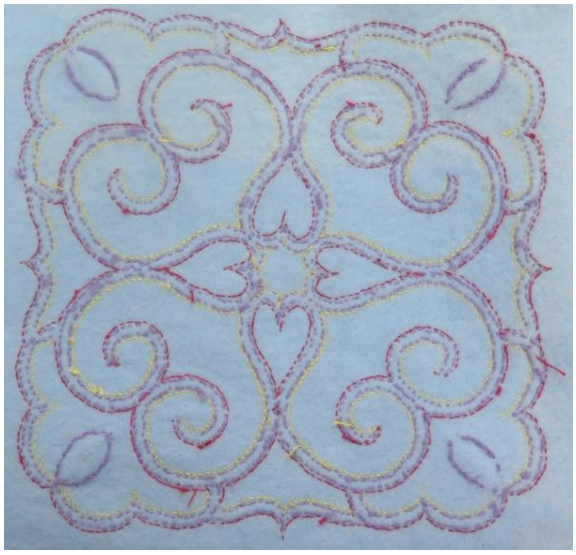


図 10　ウイルタ刺繍の裏側

・ 現在、会のメンバーは 33 名。ウイルタ刺繍を教えてくださったウイルタの女性（以下、「先生」）を知っているのは、そのうち一人のみ。
・ウイルタ民族はトナカイの革を使用していたが、フレップ会では素材が柔らかいことからフェルトで練習し、徐々にいろいろな布を使用し、作品をつくっている。
・以前、トナカイの革ではなく、柔らかいほかの革を使って刺繍したことがある。硬くて裏側に針を出せず、上だけすくった。それも少しずつしかすくえなかった。革に刺すのは大変。
・型紙は 100 種以上ある。対角線で対称になるのが特徴。ハートが基本。
・アイヌの文様との違いは分かるが、ギリヤーク・ニヴフとの違いはわからない。

・型紙は先生と先生のお兄さんが切ったものを代々大事にして今日まできているが、刺繍する人によって少しずつ変わってきている。
・サハリンで買ってきてもらった本を参考につくったものもある。自分たちが切った模様をウイルタ模様と言って良いのかなと思うこともある。
・文様の幅は基本的には 4～6 ㎜であるが、布の大きさに合わせて、細くしたり、太くしたりすることがある。
・布の色は、黒地は良いが赤い色はダメ。
・刺繍糸の色使いに決まりはない。自由にしすぎているかもしれない。
・針は革にするときは、刺繍針はダメだったので、細い絹針を使う。現在、革に刺繍することはほとんどなく、布なので、刺繍針を使用している。
・針の運びは、左右にではなく、向こう側から手前へ、自分の体のほうへ向けて刺す。先生は「ウイルタの人は、隣の人に刺さらないように、自分のほうに針先がくるように刺すんだ」とおっしゃっていた。
・主なステッチはダブルステッチとチェーンステッチのふたつ。
・ダブルチェーンステッチを、ダブルステッチとかダブルと言っている。ウイルタステッチともいう。はじめは、ステッチに名前がなかったが、ダブルチェーンステッチに似ているのでそう言うことになった。
・模様の中はダブルで、周りは絹糸（絹小町糸）でチェーンステッチする。
・チェーンステッチのみのもある。ダブルのみはない。
・文様や刺繍技法に意味があるとは聞いたことがない。
・「琉球千鳥繍い」に似たステッチの名前は、「葉っぱにするもの」と言っている。30 年前からはしていないが、最初のウイルタの刺繍はそれだった。ダブルではなく全部それで埋めていた。カーブはうまくまわらなくてきつい。先生のときからはもうダブルステッチだった。糸を 2～3 倍ほど沢山使うので、きっと糸がなかったのかと思う。葉っぱに刺すときはそれだった。先生は、「葉っぱの中のもの」「葉っぱを埋めるやつで」とか「葉っぱ埋めたら」と言っていらした。今も部分的に残している。技術も要るが少しずつでも練習して取り入れている。

ウイルタ刺繍の「葉っぱにするもの」の技法について、それぞれの表側と裏側を図 11 に示す。原資料は、フレップ会の会員から研究資料として提供いただいた、図 9 に示すフェルトに刺繍した作品で、四方の角にある「葉っぱ」の文様に施されている刺繍が「葉っぱにするもの」である。図 11 の右側の画像から明らかなように、刺繍の裏側にはまつい繍い（アウトラインステッチ）や鎖繍い（チェーンステッチ）に似た糸足の重なりがみられ、現在継承されているウイルタ刺繍の「葉っぱにするもの」は、琉球千鳥繍いと同一の刺繍技法であることが確認できた。

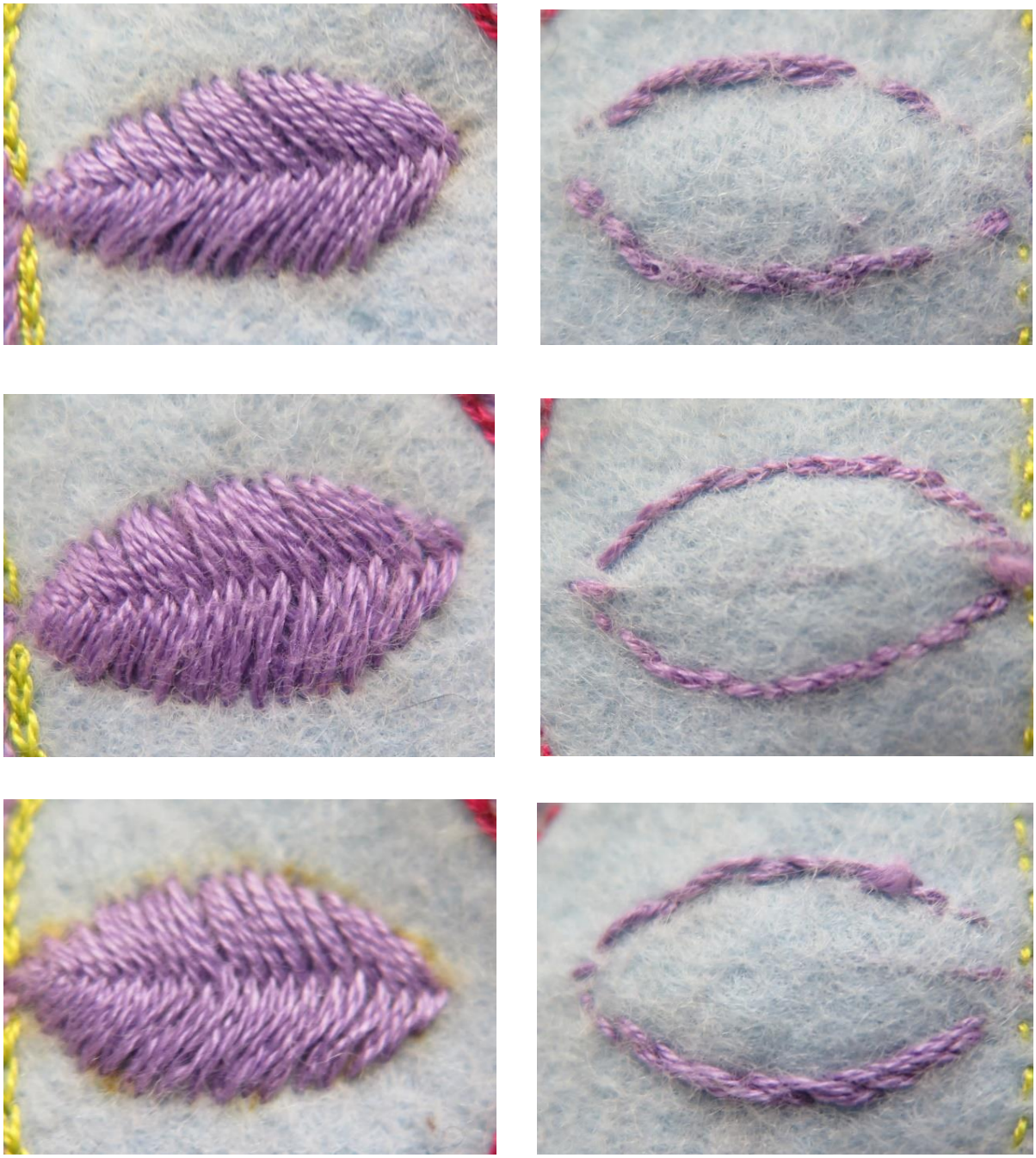


図 11　フレップ会員作品にみられるウイルタ刺繍の技法「葉っぱにするもの」
4 箇所の表（左側）とその裏（右側）

4）北海道立北方民族博物館訪問

2019 年 10 月 9 日（火）の 14 時から 16 時半まで、北海道立北方民族博物館（図 12）を訪問した。一般展示資料の見学、収蔵庫での資料の閲覧と一部資料の写真撮影および学芸員から話を聞くことができた（図 13）。

常設展示品の中には、１点、ウイルタ刺繍と似た文様と技法の、ロシアのクラスヌィ＝ヤール地域のウデヘ民族による「針刺し」があった。基布の素材は布地で、文様の内側が 3 色（黄・青・桃色）の糸でヘリンボーンステッチによって幾分荒く繍い埋められ、輪郭がアウトラインステッチの右針（↗）と左針（↖）の両方の繍いで囲まれており、製作年は「1995～1996 年」との説明があった。

収蔵庫では、刺繍が施された袋物、敷物、衣服、帽子、手袋、履物など、およそ 30 点のウイルタ刺繍関連の資料を閲覧することができた。その中には、サハリンで蒐集された手のひらサイズの袋物があり、図 1 に示すような、無撚の絹の釜糸（平糸）を用いた、文様の狭いところから広くなる部分で二つに分割して繍っている点でも、琉球千鳥繍いと酷似した技法によるものがあった。革の刺繍では裏面の糸足が見えないことから、琉球千鳥繍いと同一かは確認できなかった。収蔵資料のうち、「E-34 和風財布 ウイルタ」は、前述の田中の報告[30]にある画像の No.5 と類似しており、その刺繍技法については「ヘリンボーンステッチ、クローズド・ヘリンボーンステッチ」と記載されている。

図 12　北海道立北方民族博物館

図 13　学芸員からの聞き取り

北海道立北方民族博物館の学芸員からは、事前に送らせていただいた質問とフレップ会での聞き取りからのさらなる質問について、また、ご自身の知見についても話を伺うことができた。そのなかから、次のことを特記する。

・遊牧民は基本、織は少なく、絹はすべて外来品。
・ウイルタには鍛冶の技術はなく、金属製の針は外来品。
・色糸を使った刺繍の文化は古くなく、交易によって入手できるようになってからの新しい文化。今の刺繍の原型は、手袋などの小物や、お土産品から。
・ウイルタの存在が日本人に知られるのは 1800 年代以降。
・今日のような中央から広がる文様の刺繍は民族衣装にはなく、小物や日本人向けのお土産品にしか見られない。
・フレップ会に刺繍の指導をしたウイルタの女性は、お姉さんからウイルタ刺繍を習った。
・刺繍糸の色は、一度に三色を使う（中央と両脇）。
・文様については、ナーナイには龍信仰があることから龍の刺繍やシカや蝶などの生物がモチーフになることがあるが、ウイルタにはない。
・ヨーロッパや西アジアからの「 クローズドヘリンボーンステッチロード 」 があってもおかしくはない。

5）皮革への刺繍について

ウイルタ刺繍に関しては、「皮の刺繍の裏側には糸は見せない」との記述が多いことや、フレップ会の会員から「硬くて裏側に針を出せず、上だけすくった。それも少しずつしかすくえなかった。革に刺すのは大変」と聞き取ったことを検証する目的で、カナダ産の鹿革（厚み約 1.5 ㎜）を用いて刺繍を試みた。

その結果、革に針を貫通させることは布のように容易ではなく、針の運びは革の表面（真皮、銀面）ではなく、裏面（床面、スエード）では比較的円滑に行えたことから、「上だけ、少しずつしかすくえない」ことが確認できた。そして、「裏側には糸は見せない」ことについては、意図的な技術

ではなく、裏側まで針を通すことが容易でなかったことによるものと思われた。

また、革への刺繍において、撚りがかかっていない、無撚の絹の釜糸（平糸）を用いた場合は、比較的平易な技法の千鳥縫い（ヘリンボーンステッチ）であっても、革をくぐるときの摩擦によって釜糸を構成する細い菅糸がもつれて、乱れが生じ（図 14）、絹の撚糸を用いた場合はそれが幾分改善されるものの、針を思う方向へは運びにくかった（図 15）。そして、針目を浅くすくう平繍い（サテンステッチ）は不安定で、革には不向きな技法であることがわかった。他方で、深くすくう琉球千鳥繍いでは針運びが困難であり、安定的な針目を維持することは極めて難しかった。そのことから、革への刺繍には撚り糸を用いたヘリンボーンステッチのほうが適しており、文様の外周にチェーンステッチを施すことによって、ヘリンボーンステッチの両端の針目を押さえて補強するとともに、乱れがちな糸足の揺らぎをカバーする効果もあることがわかった。

ウイルタ刺繍がクローズドヘリンボーンステッチやチェーンステッチなどを主体としていることについて、それらの技法が皮革への刺繍においては審美性と実用性を備えた技法として必然的に選択されたのであろうことを体感した。そして、ウイルタ刺繍の古い資料、特に革に施されている刺繍は、日常の生活用品や土産用に施されているものであったが、刺繍の完成度が高く、そのような刺繍を専門職人ではなく庶民が行えたという、ウイルタ民族がもつ高度な刺繍技術を再認識した。

図 14　無撚糸による千鳥縫い

図 15　撚糸による琉球千鳥繍い・1 本立ち

4.　おわりに

本研究では、琉球古刺繍の系譜を検証する手掛かりを得る目的で、ウイルタ刺繍との類似性に着目して調査研究を行った。そして、北海道にのこるウイルタ刺繍の技法と資料について、現地を訪問して次のことを確認した。①フレップ会で継承されているウイルタ刺繍の「葉っぱにするもの」の技法は、琉球千鳥繍いと同じであった。②30 年前までは①のその技法で模様の中全部を刺繍していた。③北海道立北方民族博物館には、無撚の絹の釜糸を用い、文様を分割して刺繍することにおいても琉球千鳥繍いと酷似した、サハリンで製作されたウイルタ刺繍の資料があった。

すなわち、ウイルタ刺繍が生活や土産用品に、琉球古刺繍が特殊な装束類に施されたとの用途の違いがあり、比較した刺繍資料の製作年代も大きく隔たってはいるが、ウイルタ刺繍には琉球千鳥繍いと同じ技法が用いられていることが確認できた。

また、琉球古刺繍の製作年代（1427 年～1522 年）当時のサハリンに着目すると、前述したように、「主としてウイルタの居住地とみられる兀列河（ウリエホー）衛は 1431 年と 1437 年に、ウイルタ・ニヴフ・アイヌ諸民族の居住地とみられている波羅河（ポロポー）衛は、1428 年と 1463 年に朝貢し、サハリンの諸民族と明朝との朝貢関係が少なくとも 15 世紀末～16 世紀初頭ごろまでは続いて

いた」[21] とのことがある。当時の琉球も明と朝貢関係にあり、16 世紀中ごろ以降の刺繍資料には琉球千鳥繍いがみられず、そのころには琉球古刺繍の技法が終焉を迎えていたとみなされることから、中世という時代と、明（中国）との朝貢関係があったという、歴史的な共通点もみえてきた。

ウイルタと琉球ともに、他民族や他国との複雑な関わりの歴史を経てきており、刺繍はその過程で導入あるいは発生、展開した。ウイルタ刺繍は途切れることなく継承され、琉球古刺繍はおよそ 600 年を経て現在に再興している [16]。今後、刺繍技法に類似性があるウイルタ刺繍の系譜についても継続して調査研究を進め、明らかにしていきたい。

＜謝辞＞

本研究を進めるにあたり、織物作家の小林・グレイ・愛子氏からウイルタ刺繍の情報提供を、株式会社懐玉堂からはウイルタ刺繍の写真の提供と、掲載・公開の許可をいただきました。また、フレップ会の曽我真智子代表、小田切洋子氏はじめ会員の方々からはウイルタ刺繍の資料や刺繍技法に関する情報を提供いただき、北海道立北方民族博物館からは収蔵資料の閲覧と一部資料の写真撮影の許可を、笹倉いる美学芸員からはウイルタ刺繍や北方民族の刺繍に関する資料、専門的な情報および知見を提供いただきました。ここに、深く感謝の意を表します。

＜参考・引用文献＞

1) 渡邊欣雄ほか；『沖縄民俗事典』、吉川弘文館、p. 552、(2008)
2) Toshio Nakamura, Takako Terada, Chikako Ueki and Masayo Minami; ‘Radiocarbon dating of textile components from historical silk costumes and other cloth products in the Ryukyu Islands, Japan’, Published online by Cambridge University Press, Radiocarbon 61(6), pp.1-12, (2019)
3) 寺田貴子・中村俊夫；「沖縄の古衣装の放射性炭素年代」、活水論文集 健康生活学部編 56、pp. 1-11、(2013)
4) Takako, TERADA; “Sea Snail Purple in Contemporary Japanese Embroidery”, Textile Society of America Symposium Proceedings 138. p.1-8, 2008. University of Nebraska – Lincoln, 電子雑誌 http://digitalcommons.unl.edu/tsaconf/138, pp. 1-8, (2011)
5) 寺田貴子・植木ちか子；「琉球神女衣装の製作について」、沖縄県立博物館・美術館博物館紀要 2、pp. 27-35、(2009)
6) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品の調査 － 仲村家所蔵裂 －」、活水論文集 健康生活学部編 53、pp. 51- 58、(2010)
7) 植木ちか子・寺田貴子・片岡淳；『琉球・沖縄の衣生活概観 －遺品の実態調査からみえてきたこと－』、琉球大学教育学部織染研究室 沖縄庶民の装い展実行委員会、寺田分筆（第二部沖縄に遺る古刺繍および貝類の染織文様）、pp. 69-73、84-103、(2010)
8) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；「琉球文化圏にのこる古刺繍の調査報告 － 本部町嘉津宇の仲村家伝世品を中心に －」、琉球大学教育学部紀要 79、pp. 61-75、(2011)
9) 片岡淳・植木ちか子・寺田貴子；『平成 22 年度～平成 25 年度科学研究費補助金研究成果中間報告書「沖縄の服飾および染織技術」』、琉球大学教育学部、pp. 1-22、(2011)
10) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品 ： 仲村家所有刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 55、pp. 1-11、(2012)
11) 井上靖久・梅原敬弘・八木洋一・山本琢磨・池松和哉・寺田貴子；「琉服の DNA 型鑑定」、活水論文集 看護学部編 1、pp. 41-42、(2013)
12) Takako TERADA; Historic Embroidery Costumes and Textiles related to Noro Priestesses in the Ryukyu Islands, Kwassui Bulletin Faculty of Wellness Studies 57, pp. 23-32, (2014)

13) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品 ： 沖永良部島森家伝世 15 世紀刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 58、pp. 51-60、(2015)
14) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する刺繍品 ： 伊是名島名嘉家旧蔵 15 世紀総刺繍大袖衣」、活水論文集 健康生活学部編 60、pp. 39-46、(2017)
15) 寺田貴子；「琉球文化圏に伝世する 15 世紀刺繍品の検証に向けて － グアテマラの儀式用刺繍布パヤに関する現地調査 －」、活水論文集　健康生活学部編 61、pp. 1-17、(2018)
16) 寺田貴子・下山進・下山裕子・大下浩司・與那嶺一子・篠原あかね；「琉球王国文化遺産集積・再興事業における琉球古刺繍の復元」、沖縄県立博物館･美術館、博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.）、No.13、pp. 85-108、(2020)
17) 石川栄吉他；『文化人類学事典』、弘文堂、pp. 81、128-129、551、 (1987)
18) 吉田東悟；『大日本地名辞書第八巻　北海道・樺太　琉球・台湾』、冨山房、pp. 398、404、410、(1970)
19) 北海道立北方民族博物館；『北海道立北方民族博物館 総合案内』、北海道立北方民族博物館、p. 39、(1993)
20) 下山晃;『毛皮と皮革の文明史－世界フロンティアと掠奪のシステム－』、ミネルヴァ書房、p. 379、(2005)
21) 坪井清足・平野邦雄；『新版古代の日本 第 9 巻 東北・北海道』、角川書店、pp. 508-511、(1992)
22) 間宮林蔵述・村上貞助・洞富雄・谷澤尚一；『東韃地方紀行他』、北夷分界夜話巻之七・八、平凡社、pp. 70-113、(1988)
23) 今野淳子；『唐太日記・北蝦夷餘誌』、pp. 126、141-148、156、(2013)
24) 谷内尚文；『樺太風物抄』、七丈書院、pp. 187-188、(1944)
25) 田中了、D.ゲンダーヌ;『ゲンダーヌ－ある北方少数民族のドラマ』、現代史出版会、pp. 273-286、(1978)
26) 宮本馨太郎；「オロッコ・ギリヤークの衣食住」、民族学研究 22/1～2、pp. 5-14、 (1958)
27) 河野本道;『北海道ライブラリー8 北方の民具 1』、北海道出版企画センター、pp. 159-177、（1976）
28) 田中了；「ウイルタのイルガ」、染織 α、No.5、pp. 8-9、(1981)
29) 池上二良；『ウイルタの暮らしと民具』、北海道庁社会教育部文化課編、網走市北方民族文化保存協会、pp. 1-116、(1982)
30) 田中淑乃；『昭和 63 年度 ウイルタ民族文化財 緊急調査報告書（10）ウイルタ語生活語彙 ウイルタの刺繍』、北海道教育委員会、北海道教育庁社会教育部文化課、pp. 83-116、(1989)
31) 米村哲英；『《国際染織美術館開館記念》「特別展　北方民族・鮮麗な繍の文化展」』、国際染織美術館、pp. 7-11、25-27、(1986)
32) 白石英才・笹倉いる美；「ニヴフ（ギリヤーク）の縫い方」、北海道立北方民族博物館研究紀要、第 16 号、pp. 69-76、(2007)